

## 佐渡・海府地区のくらし

## 本財団事務局

新潟県佐渡市北部に位置する海府地区は、真更川、北鶴島、願、藻浦、鷺崎、見立、北小浦、虫崎、黒姫の九集落で構成され、三三一人（令和七年一月末現在、以下同）が生活している。佐渡島中央部に位置し、市の人口の八割ほどが在住する国中平野までは車で一時間ほどである。本稿では、令和七年一〇月三日から四日にかけて実施した調査に基づき、同地区の現況について、鷺崎集落を中心に報告する。

## 兼業漁師が多い鷺崎集落

海府地区区長連絡協議会会長であり、同地区で住民の最も多い鷺崎集落（人口一六八）の区長でもある齊藤之男さ

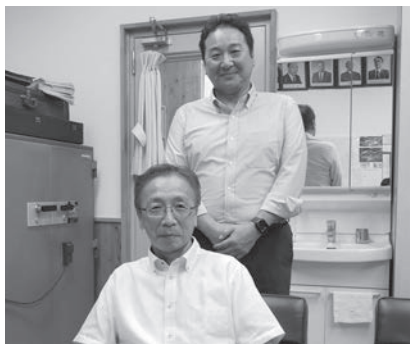
んによると、鷺崎では住民の多くが漁業と農業を組み合わせた生活を送っているという。漁業を主として、農業は自家消費用の野菜を栽培する家庭が多い。

地域で最も大きなイベントも漁業に関連しており、毎年一二月月上旬に開催される「佐渡海府寒ぶり大漁まつり」は、会場となる鷺崎漁港に、毎回佐渡島内外からの多数の来場者が訪れる。齊藤会長は、「内海府漁協内の実行委員会が主催するイベントで、三〇〇〇〜四〇〇〇円／キロと特別価格で寒ブリを販売したり、長さ二〇メートルほどの特設水槽でブリを泳がせ、順位を当てる『寒ぶりレース』や伝統芸能であ

る鬼太鼓などが行なわれる。一年を通して鷺崎が一番盛り上がる」と語る。鷺崎集落への移住のハードルとなっているのは、住居問題。空き家が多く、家主に譲渡の意向があっても改築・改修の費用負担がネックとなっているケースが多いという。加えて、鷺崎集落から生活が便利な島の中心部に住まいを移す人も少なくない。齊藤会長は、「佐渡市全体の人口増減に影響は少ないものの、転出が続く鷺崎集落は、見



鷺崎ふれあいセンターにて。齊藤之男海府地区区長連絡協議会会長。



椎 一夫内海府小学校校長(手前)と山口 智中学校校長。

えにくいだけで高齢化・人口減少が一層深刻。状況を打破するためには新たなアイデアと行動力を持つ人材が必要だ」と現状について説明する。

### 地域一丸となった離島留学の受け入れ

鷺崎集落に立地する市立内海府小学校は、全校児童・生徒一二名(小学生六名、中学生六名)の小規模校である。今回、椎<sup>しい</sup>一夫<sup>かずお</sup>小学校校長と、山口<sup>さとし</sup>智中学校校長からお話をうかがった。

内海府小中学校の児童・生徒は、地元から通う二名を除き、佐渡市が実施する島留学(以下、離島留学)制度を利用している。学生寮や里親の下に単身で寄宿し通学する形式の離島留学ではなく、親子での移住を基本とする点が最大の特徴だ。保護者もともに移住することで、子どもたちの心理的な不安を減らしつつ、家族ぐるみで地域に深く関わるができる。山口中学校長は、「内海府小中学校の卒業生を介して、学校と地域が一丸となることで離島留学が実施できている。地域の皆様などの協力のもと、放課後や休日にタコ釣りや山菜採りなどを行なっている」と語る。

内海府漁業生産組合から無償提供される水産物(ブリ、イカなど)、鷺崎産の野菜(玉ねぎ、じゃがいもなど)、魚の内臓などを還元発酵させた堆肥を使用し、鷺崎で育てられた米「海の米」を用するなど、海府地区をはじめ佐渡の

食材にこだわった学校給食も大きな特長である。「砂糖を蜂蜜で代用することで、調味料も含めたオール佐渡食材で給食を作ったこともある。自分たちの後輩に地元のを食べて育ってほしい、という思いをもつ卒業生も多い」と、椎小学校長。

一方「離島留学のニーズは高いものの、集落内の住居不足により引越すことができない」「市の島留学生活支援金制度や、移住に必要な住宅の賃貸補助制度、空き家のリフォームに対する支援金制度は存在しているが、留学に係る費用全体をカバーするには十分ではない」と語る保護者もいるという。鷺崎集落では、住居不足解消を目指し、地域の方々の手で空き家のリフォーム、改修を行なうなど、受け入れ環境の整備が進められている。

### 鷺崎の新しい観光・交流拠点施設

鷺崎集落に令和七年四月にオープン



「Ni-ya」にて。當山 歩さん(後列中央)と離島留学保護者、関係者の皆様。

した農家民宿「にいや」。オーナーの當山歩やまあゆみさんは同集落出身で、高校卒業後に新潟市内での就職・結婚を経て、数年前にUターンした。空き家となって

いた古民家をリノベーションし、民宿として再生。一日一組限定、最大六人まで泊まれる素泊まりの宿で、宿泊者は自炊ができる。一日ゆっくり過ごす、

「Ni-ya」を拠点にして佐渡全域をまわるなど、観光客の多様な利用に応えるのがねらいだ。宿泊利用者がいない日には、仲間内で集まり、食事を囲んで語らう場所にもなるという。

今後は、地元の方に総菜や鷺崎の米を使った生米パンといった食品販売の拠点として使用してもらうなど、より用途を広げた集落のコミュニケーションスペースとしての活用も考えている。當山さんは、「内海府小中学校の離島留学の保護者」と

もに、ハンドメイド作品や飲食物などを販売する交流イベント『鷺崎マルシェ』を開催し、地域を盛り上げていきたい」と展望を語る。

### トビシマカンゾウの保全活動

海府地区の象徴ともいえる景勝地「おののがめ大野亀」は、五月下旬から六月上旬にトビシマカンゾウが一面に咲くことで知られる。トビシマカンゾウは、佐渡島と山形県飛島、酒田海岸のみで見られるワスレグサ科の多年草である。長年この地でトビシマカンゾウの保護活動に尽力してきたのが、佐渡両津海府観光協会の会長であり、レストラン「大野亀ロッジ」を営む北澤博満さんだ。「コロナ禍以前は、トビシマカンゾウの開花時期に合わせて観光協会が『カンゾウ祭り』を四〇年以上続け、島内外から多くの観光客を集めていた。地域の高齢化が進み、財源やスタッフの確保、出演団体の調整が難しく、祭り



北澤博満佐渡両津海府観光協会会長。大野亀ロッジでは、自ら釣り上げた鮮魚を提供。

は中断しているが、花の見ごろには『カンゾウWEEK』として規模を縮小したイベントを開催している。最終日には芸能披露や地元の小中学生のステージ発表、カンゾウの苗の販売などが行なわれる」

北澤会長は平成八年から地元住民や小中学生と協力し、地域ぐるみでトビシマカンゾウの保護活動に取り組んできた。かつて佐渡牛の飼料にするため雑草を刈っていた大野亀では、地域の

方々が数年かけてトビシマカンゾウの苗を植栽しているほか、周囲の萱や葦の刈り取りを行なうなど、群生地保全に取り組んでいる。令和七年三月には、破損していた遊歩道が修繕整備され、再び観光客が安全に鑑賞できる環境が整った。

### 島内のインフラを守る佐渡潜水

両津地区に事務所を構える佐渡潜水株式会社では、潜水工事や調査業務を中心に、島内で海に関連する幅広い事業を行なっている。黒姫集落（人口二百七人）出身の正司<sup>しょうじ</sup>正会長は、平成元年に佐渡スキューバダイビング協会を立ち上げ、初代事務局長に就任。現在は顧問を務める。同協会は、遊漁船組合と連携して禁漁区を管理。ダイビングエリアを整備し、北小浦沖のコブダイ鑑賞の魅力を積極的に発信している。

佐渡潜水の業務の重要性について、「佐渡の入港船舶のスクリーナーにロー

プや流木といった異物が巻き込まれた際、佐渡汽船や漁業者の要請を受けて船底調査や復旧作業を実施する。両津火力発電所のオイルフェンス・栈橋やテトラポットの設置補助なども行なう。水中土木を通して、島内のインフラを守る役割を担っている」と、正司会長は説明する。

漁業分野では、黒姫・北小浦・鷲崎集落を中心に、大型定置網のメンテナンス、アワビ・ナマコの水揚げのサポートや稚貝・稚ナマコの放流を実施している。海藻養殖にも取り組んでおり、ワカメ、コンブ、ナガモ、アラメに加え、令和七年からはクロモ養殖も始めた。「対馬海流の影響で、佐渡近海は海水が澄んでいるため、太陽光が届き、海藻が育つ限界深度が深い。海水温上昇によって佐渡全体で海藻が不作だった時も、黒姫沖三〇〇メートル、水深一五メートルの海域では、磯焼けで収穫量を減らすことなく養殖できた」



佐渡コンブ養殖研究会会長も務める正司 正佐渡潜水株式会社社長。

正司会長が代表として参画する「佐渡島自然共生ラボ」では、「海藻プロジェクト」としてシンポジウムを主催したり、「石川県輪島市で地元漁業者と連携して調査研究する石川竜子氏のプロジェクト」「わじま海藻ラボ」と交流し、種苗生産のための資材の設置などの震災復興支援に取り組む。このほか、高校生への普及活動や、漁業事業者とのマッチングなど海藻の新たな価値の創出にも挑戦している。

## 島の食材を使った薬膳レストラン

虫崎集落（人口二七人）の海辺にある島薬膳レストラン「メレバレカイコ」は、歌見集落のお米をはじめ佐渡島の食材をふんだんに使った薬膳メニューが人気を博している。店を運営する池倫子さんは、新潟市出身。四〇代で移住を決意、海が見えるという条件で予算に合う物件を探したがなかなか見つからず、三年にわたり探し続けた結果、現在の店舗（物件）にたどりついたという。物件探しの期間中に知り合った地域住民らの協力のもと、「特定有人国境離島地域社会維持交付金」の雇用機会拡充事業などを活用し、空き家をリノベーション。令和四年にメレバレカイコを開業した。

移住前は、東京や新潟市内でウエディングプランナーとして働いていたという池さんは、その経歴を生かして、飲食店経営に加え、市の委託を受けて婚



「メレバレカイコ」を運営する池 倫子さん。店では島薬膳ランチなどを提供する。

活イベントなども運営している。他にも島外からアーティストを招いて月に一回、音楽イベントを開催したり、地域の人々と連携し、染物体験や地元食材を使ったローカルツーリズムを企画するなど、精力的に活動している。

「金山のような観光スポットがある地域ではない分、自分たちでイベントを作っていかないと」と、語る池さん。ゆくゆくは佐渡最大級の音楽イベント「アースセレブレーション」のような企画を海





UKUU 代表を務める兵庫 勝さん。令和7年5月から歌見棚田新聞「だんだん」を刊行。

府地区でも開催して地域を盛り上げたい、と意欲を見せる。

## 歌見棚田の保全

海府地区の南に隣接する歌見集落には、海岸まで棚田が広がっている。現在、棚田全体の三分の一程度を活用して、一二人ほどによる稲作が行なわれている。この棚田の維持に携わっているのが、虫崎出身の兵庫<sup>ひょうご</sup>勝さんである。兵庫さんは、高校卒業後、本土へ

進学、社会人経験を積んだのちにUターンした。現在、自身の水田を維持しながら、地域全体の棚田の保全活動にも関わっている。このほか兵庫さんは、内海府・内浦地域の活性化を目指し、令和二年に活動団体「UKUU」<sup>ユークユー</sup>を発足。同七年には過疎地域持続的発展優良事例表彰において総務大臣賞を受賞した。歌見棚田では、急傾斜地など整備が困難な耕作地を対象とした農林水産省の「中山間地域等直接支払制度」を活用し、林業に携わる若い個人事業主らが、空いた時間に草刈りを請け負い、その報酬を副収入とする仕組みが機能しており、農地の維持と地域の雇用が同時に図られている。近年はコストダウンを目的にドローンによる直播<sup>ちまはん</sup>（苗床を用いず直接田畑に種子を蒔く播種法）などの新技術も導入。「手間暇かける昔ながらの稲作と、最新技術を活用した効率的な稲作のハイブリッドで、この棚田を維持していきたい」と話す。

このほか、兵庫さんは民話をモチーフとした田植えイベント「鬼の田植え」を地域児童とともに開催したり、出身の虫崎集落への誘客に向けた「一〇〇人盆踊り」の企画・運営を担うなど多方面で活躍している。

海府地区では、人口減少や高齢化の進行により、集落の担い手確保や生活基盤の維持が課題となっている。しかしながら、地域一体となった離島留学、空き家を活用した飲食店や宿の開業、棚田の維持管理など、住民自らが地元資源を活かし、持続可能な集落づくりに取り組む動きも広がっている。人口規模が小さく、多様な組織・人々の連携が求められる中、Uターン人材も加わり、地道に地域づくりを続ける海府地区の今後に、引き続き注目していきたい。

（大川・清水・奥村）